

【実務経験のある教員一覧】

教員名	担当科目名	単位数		開講年次	備考
		通信	面接		
渡邊 暁	社会福祉	2		1年次	
	社会的養護Ⅰ	2		1年次	
	社会的養護Ⅱ		1	2年次	
	子育て支援		1	2年次	
	子ども家庭支援論	2		2年次	
	保育実習事前事後指導Ⅰ（施設）		1	2年次	
	保育実習Ⅰ（施設）		2	2年次	

【担当科目に関連した実務経験】

ソーシャルワーカー（社会福祉士・精神保健福祉士）として医療法人に勤務し、法人が実施する地域福祉支援を担当した。所属した医療法人では理事長の日本医師会副会長・日医総研所長のリーダーシップのもと、医療と福祉（高齢者、障がい児及び障がい者、社会的養護を必要とする子どもが暮らす地域）との連携のあり方に注目し、法人に所属する社会福祉士として、率先して地域福祉ネットワークの構築、協働を図る体制づくりを推進していた。

その中で、とりわけ子育てをしている母親たちへの居場所作り、具体的には公民館との協働によるコミュニティカフェと子育てに対する悩み相談、加えて経済的な不安定、非行や虐待などの問題の程度に応じ社会的養護・社会保障制度におけるサービスの情報提供を行った。

例えば社会的養護を必要とする経済的に苦しく生活保護を申請したいという母子家庭の母親に対して、福祉事務所のケースワーカーと公共職業安定所職員が役割を分担して、母親の支援を行ったり、地域の高齢者や高齢者施設入所者と、地域の保育園・幼稚園との世代の枠を超えて子どもを支えていく世代間交流事業、高齢者の経験、助言による子育て支援の場づくりに努めた。

さらに、法人内の病院や高齢者施設で医療福祉系（看護師・社会福祉士・介護福祉士・理学療法士・作業療法士等）の実習を受け入れ、対人援助の基本姿勢や心構え、業務手順の説明、反省会の開催、実習日誌の書き方、個別支援計画の作成などについて、実習生に指導した。

以上のような医療福祉機関での実務経験をもとに、「社会福祉」「子ども家庭支援論」「社会的養護Ⅰ」「社会的養護Ⅱ」「子育て支援」「保育実習事前事後指導Ⅰ（施設）」「保育実習Ⅰ（施設）」について講義する。

教員名	担当科目名	単位数		開講年次	備考
		通信	面接		
橋本 翼	教育相談	2		2年次	
	幼児への特別な支援	1		2年次	
	障害児保育		1	2年次	
	青年心理学	1		2年次	

【担当科目に関連した実務経験】

臨床心理士の資格を有し、精神科病院における小児外来で3年勤務し、発達障害児（知的障害、ADHD、ASD等）の知能検査の実施、カウンセリング、発達障害を抱える保護者へのカウンセリングを行ってきた。

その後11年間公立小、中、高校でスクールカウンセラーとして勤務しており、不登校児童生徒のカウンセリングや、教師へのコンサルテーション、青年期の中、高校生のカウンセリングを行い、いじめ、不登校、自殺、精神疾患等の問題の取り組みを行ってきた。

また、現在保育園における発達障害児を含む「気になる子」の支援に関してフィールドワークや保護者のカウンセリングも行っており、担当する「教育相談」「幼児への特別な支援」「障害児保育」「青年心理学」については、実務経験をもとに幼児教育・保育現場における、カウンセリングマインドに基づく幼児理解や保護者支援の在り方、関係機関との連携に関して学生が体験的に学べる授業を行う。

教員名	担当科目名	単位数		開講年次	備考
		通信	面接		
神近 裕樹	保育の心理学	2		2年次	
	子ども家庭支援の心理学	2		2年次	

【担当科目に関連した実務経験】

臨床心理学をベースに日頃より、臨床心理士指定大学院内に設置されている相談室にて乳幼児から成人のクライアントの心身の発達や不登校などの不応への相談支援等を行っている。

また、乳幼児から思春期の児童および保護者の支援を行う精神科病院にて、療育やカウンセリング、保護者面接等も行っている。

さらには、スクールカウンセラーとして小・中学校へ赴き、児童・生徒らのカウンセリング、そして保護者への相談援助を行い、ケースによっては、個人ではなく家庭全体へ対して他職種と連携してケースワーク的な働きを行うこともある。

以上の実務経験より、担当する「保育の心理学」「子ども家庭支援の心理学」において保育や子ども、そして保護者を含む家庭全体を心理学の視点からどのように理解し支援を行っていくか、また、相談援助を行う上で必要となるカウンセリングの技術も混じえながら伝えていく。

教員名	担当科目名	単位数		開講年次	備考
		通信	面接		
坂口 美由紀	乳児保育Ⅰ	2		専攻科	
	乳児保育Ⅱ		1	専攻科	

【担当科目に関連した実務経験】

乳児保育の科目では、0・1・2歳児の子どもへの対応や保育内容だけでなく、乳児保育が求められるようになった歴史や社会背景を踏まえ、保護者や関係機関とどのように連携を取りながら、保育者として子どもの健やかな成長を支えるために必要とされる知識や技能について幅広く学びます。

保育者が子どもの安心・安全を守りつつ、見通しを持った保育計画、適切な関わりや活動を準備して質の高い保育を実践するには、まず子どもの発育・発達の道筋、発達課題に応じた環境とは何かを知ることです。また子どもにとって家庭環境は最も重要なものであり、保育者は日常的に保護者と協力し合いながら子どもの成長を支えています。必要に応じて子育てを支える制度や支援機関を紹介したり、その機関と連絡を取り合ったりすることも出てきます。さらに0・1・2歳児の時期には、子どもの発達の遅れや障がい、虐待などの発見過程に出会うこともあり、迅速かつ適切な対応を求められます。このように保育士とは、子どもと子育てに関する高い専門性を有することはもちろん、関係者とチームで協力し合うためのコミュニケーション力も必要なのです。

私はこれまでに、療育センターや発達障がい者支援センターなどの公的機関や個人開業等の相談・療育支援の現場に20年以上携わり、0～6歳までの障がい幼児への心理判定（発達検査等の実施）、障がい幼児を持つ保護者への発達相談、障がい幼児と保護者を対象とした療育グループの運営、保護者向けの学習会の講師等々、さまざまな業務を行いました。現場では保育士を始めとした多職種が連携し合いながら親子を支えたとともに、幼稚園・保育所と連携を取ったり、児童相談所・保健センター・医療機関等、地域の自治体や関係機関と情報共有したりと、関係者間で協力、調整し合う機会も数多くありました。

携わっている現場は障がい者が主ですが、障がい特性や対応は一般の子育てに通じ、発達検査の施行には一般的な発達過程の知識は必須です。チームで関わること、現代社会の子育て事情や制度の変遷、社会問題などに精通していることも共通しており、社会情勢や最新の研究動向について日々の情報収集は欠かせません。

そのような現場での実務経験を元に、担当する「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」では、子どもの発達やその対応、保護者支援、関係者との連携、社会制度の仕組みや変遷、障がいや虐待など、保育士の専門性に必要な知識や技能習得をねらって、レポートや試験、スクーリングの講義の内容を組み立てています。またスクーリングには演習を取り入れる等、コミュニケーションをとりながらチームで協力し合う経験と意義を学ぶ機会になればと考えます。